

ユーザープロフィール

1900年創業し、日本最大規模の総合印刷会社として発展。証券・カード、商業印刷、出版印刷、パッケージ、産業資材、エレクトロニクス、オプトロニクスの7部門で多彩な事業を展開。新しい需要を自ら開拓する「需要創造型」活動を推進する。

凸版印刷「画像工房」

CMSの標準モニターに採用
下版までの時間を大幅短縮

校正紙の出力枚数を減らし、校正のやりとりをシンプル化するため現在、普及しつつあるモニタープルーフ。しかし、その運用のためには徹底したCMS（カラーマネージメントシステム）の確立や日常管理体制の維持のほか、入稿画像を精密に映し出し、実際の印刷状態を厳密にシミュレーションするためのカラーモニターが必要となる。

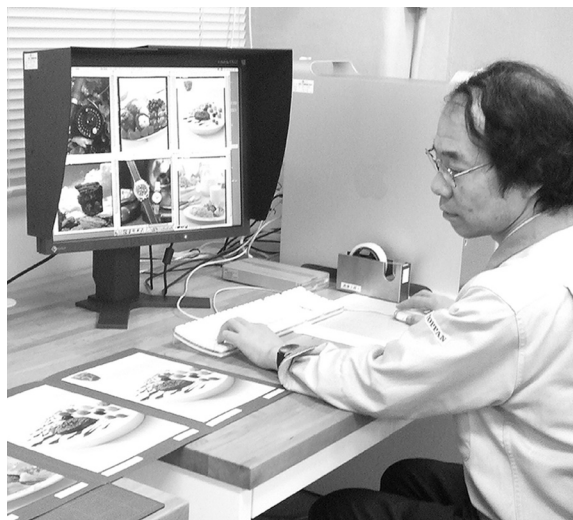
凸版印刷ではCMSの技術革新に合わせ、2003年にいち早くナナオのカラーマネージメント液晶モニターEIZO ColorEdgeを導入。自社のCMS基準を裏付ける標準モニターとして使用。現在、導入数は100台を超えている。

■精度の高いキャリブレーションが導入の決め手に

デジタルカメラの普及により、現在ではRGBデータでの入稿が一般的となった。しかし、印刷を行うためには色域の異なるRGBからCMYKデータへの変換が必要。印刷された校正紙で色を確かめながらデータを再調整し、校正を何度も繰り返す。クライアントが納得する色へ近づける作業には膨大な時間が必要だった。

しかし、週刊誌などの時間を争う媒体では、下版直前にデータ入稿されるケースが頻繁にある。十分な色校正作業の余裕のない中で求められた手法がモニタープルーフだった。モニター

プルーフの信頼性を高めるためには、RGB画像からCMYK画像まで精密にモニター上で表現できることが重要になる。試行錯誤の末、最終的に導入したのがColorEdgeだったという。ハードウェア・キャリブレーション対応のColorEdgeは、色温度や輝度の経時変化を自動



ColorEdgeを使い、モニター上で色調をチェックする

補正し、恒常的に安定状態を保つという優れた特徴を持つ。

「CRTの頃からいろいろなものを試してきました。ColorEdgeは、立ち上げから標準状態までの安定が早く、さらに、簡便な操作と数分で精度の高いキャリブレーションができたことが導入の決め手でした」と品質管理部品質技術主任・後澤尚人氏は話す。

凸版印刷では、色管理を徹底しながらクライアントと色に関するコミュニケーションを取るため、データの最適加工を専門に行う「画像工

房」を設立している。

入稿されるデータをより正確な状態で確認するため、印刷シミュレーションルームを3部屋設置している。

「この部屋の照明条件は標準値に準拠して管理されています。壁紙も無彩色のグレーに統一されていますので、モニターや印刷物・DDCP出力物の色調を正確に観察・評価できるような配慮されています。ここでのモニターの表示色が当社の全モニターの基準色再現となっています」。(後澤氏)

■色環境ベースに、直接対話が信頼に

凸版印刷では、クライアントに実際にこの画像工房へ足を運んでもらい、印刷のシミュレーションを行っている。まずは標準状態の中で、ColorEdgeを使ってRGBデータの色を確認してもらい、さらにCMYK変換した後のシミュレーション画像を見せ、クライアントの声を聞きながら、その場で調整を行う。

モニター・DDCPなどCMSは自社印刷基準と一貫した色再現がされるよう管理されているため、モニター上のCMYK変換画像で校正確認を終えることも可能だ。

「周囲の環境設定も含め、標準状態が確立されてはじめて、入稿データが正しく表示されていることになりす。求める画像に補正してからモニター上でシミュレーションし、クライア

ントの要望に応じてDDCPを出すという手順を踏むことで、校正から下版までの時間を大幅に短縮できます。またCMSが確立されていないデジタル黎明期ではモニターの表示は『合っていない』のが当たり前でした。平台校正ありきで何度も校正を繰り返していました。現在もそうですが、平台校正は安定的なものではないですから、微妙な再調整(1〜2パーセントの修正)はかなり苦労していましたね。

この環境が作られてからは早い段階で色の確定とシミュレーションができるようになったため、クライアントの安心感と信頼が高まりました」とトッパングラフィックコミュニケーションズGA製版部 画像グループチーフ・関正行氏は話す。

「デジタル化で原稿がデータとなり色調の確認がしづらくなったと言われて久しいですが、弊社では、原稿であるRGBデータの色調基準として、得意先と凸版双方にColorEdgeを設置し、設定を共通化する試みを進めています。得意先と印刷会社で、原稿の色調認識・仕上がりイメージの共有化がこのモニターで容易に行えることは、最終品質の水準を上げることにより大きな効果が期待できると考えています。今後、モニターをデジカメなどのRGBデータのカラービューアと位置つけた、印刷用途のモニター標準化が重要と考え取り組んでいます。初校時から完成度の高い画像制作の仕組みを構築してい

きたいですね」。(技術開発CS長友慶典氏)

今後のサービスマネジメントについて関氏は「校正を繰り返して良いものに仕上げる時代はすでに終わった。ハードプラットフォームを出す前に、モニターで印刷シミュレーションができるのだから、初校の段階で最高の物を出すということを当り前にしていかなければならない」と話す。

「デジタル化とCMSの確立で画像制作は昔に比べ、より効率的に進めることが可能になりました。しかし、ツールが揃ったにもかかわらず、デジタルデータの品質に不安を感じているクライアントはまだ多い。当社が構築した『画像工房』は、クライアントとの直接対話の中で作りあげるので、精度の高い画像を提供することができ、通常ラインで入稿されるデータはモニタープラットフォーム環境が得られた中でもニュアンスの違いが生じることがあります。

このような基本品質の底上げに、CMSをベースとした社内プリンティングディレクターやオペレーターへのソフトウェア教育はとて大切ですし、積極的に進めていきたいと考えています。出版社・編集部をはじめ、デザイナーやフォトグラファーの方々が納得する色をそのまま印刷へ反映するという根底理念は変わりませんが、デジタルのメリットをさらに高めながら無駄を省き、クライアントに安心を感じてもらえる仕組みづくりをさらに進めていきたい」(関氏)